

法華経にとっての三つの宝

——法華経の系譜…インド・中国・日本

ロケツシユ・チャンドラ

鳩摩羅什・日蓮大聖人・池田会長

法華経は、民衆の現実生活に深い影響を与え続けてきた偉大な精神的創造物です。

法華経は1600年前、鳩摩羅什によって、サンズクリット語から中国語に翻訳されました。彼は法華経（の真意）を解釈し、創造的に翻訳しました。

13世紀の日本で、日蓮大聖人の創造的解釈により、法華経に新たに生命が吹き込まれ、それは社会の潮流となりました。日蓮大聖人の著作と説法によって、「月氏の国・インド」のメッセージは「日出づる国・日本」

で新たな輝きを得たのです。

そのメッセージは、さらに池田大作先生のご思想とダイナミックな行動によって活力が与えられ、経典としての輝かしい頂点へと高められました。池田先生は、法華経のメッセージを、数々の価値で荘厳された、現代における「生命の無上の歓び」に変えたのです。

法華経にとってのこれら3つの宝は「正覚の菩提樹」の変化相であり、それはまた人間に具わる聖なる存在を開示しゆく壮大な出来事なのです。

法華経とは、その「目覚めへの道」の途上で、平和と歓喜をはぐくんでいける経典です。その道では、だれ

もが他者とともに、相互理解を深めながら、生命に奉仕する「調和の社会」を築いていけるのです。鳩摩羅什は、中国語への創造的な翻訳において、こうした法華経の根底にある真意を表現しました。私たちは、幸



蓮華をかたどった台座で思索する「若き鳩摩羅什」像。生地・クチャ（中国新疆ウイグル自治区）の龜茲石窟研究所の前庭に建つ。これと同形の高さ60cmの像が同研究所から池田SGI会長に贈られ、「法華経——平和と共生のメッセージ」展に展示された

福になるために生命を見つめなければなりません。そして他者に奉仕することで幸福にならねばなりません。鳩摩羅什訳の法華経は、その古典的散文の輝きによって、中国の法華経信仰者にとつての清流なのです。

そして、鳩摩羅什の汲めども尽きぬ創造性の流れの中で、日蓮大聖人は、彼の時代の不安の奥底にあるものを見きわめました。大聖人の智慧は、生命の現実に必要な秩序の光をもたらしました。そして、民衆の日常的願いに応えるだけでなく、他者とも幸福をわかちあつていけるといふ驚嘆すべき奇跡をもたらしたのです。「正覚の菩提樹」から新たに豊かな葉の繁りが生まれ出たのです。葉は、太陽の光と熱なくして存在しません。太陽は昇りました。日蓮の「日」の字の中に。法華経の不可思議な力を全宇宙へと広げるために。

そして、池田SGI（創価学会インタナショナル）会長は、花開いた蓮華であります。会長は、世界の人々を、法華経の春風の存在に気づかせました。パーリ語の仏典『長部』（デーガ・ニカーヤ）の注釈書には、「世界が誕生する時、一輪の蓮華が湧き出で、花々をもたらす」



東京での法華経展を訪れたロケッシュ・チャンドラ博士（2012年3月24日。創価大学で。左はナランダ大学のサバロワール副総長）

とあります。同じように、池田会長の智慧と行動における八正道——正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定——の中で、法華経は蓮華の華として開花しているのです。

会長は法華経を、すべての実践者が目覚めゆく道程として、とらえておられます。法華経の心は、利己的な執着のすべてを捨て去り、生きとし生けるすべてを救済しようとの誓願であり、他者のことを我がこと

ように感じる深い共感の心です。池田会長の大きな思想は、世界中の幾百万という人々の人生の使命となつていきます。この世界は今、行き過ぎた物質主義とテクノスフィア（技術圏）の火宅に閉じ込められています。そうしたなか、池田会長に連なる人々は、法華経の「無上宝聚不求自得（無上の宝聚、求めざるに、おのずから得たり）」（信解品）の精神で、自己を變革する生き方、他者に尽くす生き方に奮い立っているのです。「無上の宝の聚まり」とは、法華経の教えのことであると池田会長は言われています。

「生命がキーワードの時代」へ

池田会長は、自分自身の智慧と奉仕の生命以外のところに妙法はないと語られています。

会長は、まことに適切なことに、ヘルマン・ヘッセの詩「書物」を引用されています。「君が求めている光は 君自身の中に宿っているのだから」（三浦鞆郎訳。聖教新聞社「法華経の智慧」第一巻・「哲学不在の時代」を超えて）と。また、詩人ホイットマンを引用して「たとい神

だとして『君自身』以上に神聖ではない」「創造のための法則」、鍋島能弘・酒本雅之訳。前掲書・民衆に呼びかける経典」と呼びかけておられます。

池田会長の根本精神は「人間中心」です。「赤裸々な一人の人間として、他者に対し、社会に對し、何ができるか」(前掲書・同)という精神です。

池田会長の世界は、人間であり、社会であり、生命そのものであります。池田会長の人間中心の思想は、欲望と社会的無関心によって混乱し、とめどなく精神性が衰退している現代人の心に緊急に必要なものです。

日本での津波の際の(原子力発電所の)災害など、科学技術による災害は、人間生命の価値がどんどん忘れられている事実を浮き彫りにしています。ゆえに、池田会長の「生命の尊厳とその無限の可能性」に対する明快な宣言は、最も時になつた慈雨なのです。近い将来、世界中の指導者が、精神性を鼓舞する池田会長の言葉、すなわち「生命がキーワードの時代」の到来を認識することでしょう。池田会長は「華嚴経では、心と仏と衆生は無差別であると説いているが……『生

命』は、これら三つを統一的に表現できる、現代的な言葉でもあります」(前掲書・生命がキーワードの時代へ)と述べています。池田会長は、ものごとを実践的に関連づけて、人々に力強いエネルギーをもたらす天才なのです。

私がいつも感嘆するのは、池田会長がやすやすと、現代の言葉で法華経の表現に生命を吹き込んでおられることです。個人の「成仏」は、生命浄化の力による「人間革命」と表現されます。池田会長の感動的で簡潔な表現の中には、生命の無限の可能性が込められています。「大宇宙即生命であり、生命即大宇宙です。生命それ自体が、作者であり、しかも、作品なのです」(同)と。なんとポジティブな思想でしょうか。いかなるドグマをも超越し、いかなる原理主義とも無縁な台座の上に、人間の価値が据えられています。

平和行動——それは「心の力の探求」

池田会長は、「善男子・善女人」と説く法華経のとおり、女性の平等を強調されています。この「善」とは、

意思と振る舞いにおける善を意味します。法華経は、性別や知識の量、権力や経済力など、いかなる差別にもとらわれず、全民衆の幸福のために説かれました。教団（サンガ）への女性の参加は、あらゆる差別を根絶するための革命的な行いであつたのです。

池田会長は、戸田城聖第二代会長による「軍国主義との闘争」の後継者として、平和を強く訴えてこられました。また、日蓮大聖人は、全民衆の平和のために法華経を説かれました。池田会長は平和のメッセージの力強い提唱者です。会長にとって、そのメッセージを広めることは、人間の心（の力と可能性）への真の探求でもありました。人間の心こそ、すべてを育て発展させる大地だからです。

池田会長の偉大なご決意とは、価値を創造し、その価値を人々に伝えることでもあります。そして、在家の男女で構成されたこの新たな教団（サンガ）が「創価」と名づけられていることは、会長のアプローチを明確に強調しているといえます。

池田会長は素晴らしい詩人であり、魅力にあふれた

簡潔な言葉は、読む人の心に、献身の行動への思いを鋭く、そして過つことなく呼び起こします。

会長は、巡礼者であります。

「光 もとめて／われ 進みゆく

心の 暗雲をはらわんと／嵐に動かぬ大樹を求めて」

（前掲書・「哲学不在の時代」を超えて。戸田第二代会長との出会いの際の詩）

そして、池田会長ご自身が、偉大な菩提樹となられたのです。その枝は、人類とすべての生命に襲いかかる経済的暴力、テクノロジーによる冷たい論理の支配といった暴風雨にも、決して、たわむことはありません。池田会長の揺るぎなきご決意はまさに、あまたの宝玉が互いに輝きを映し合う因陀羅網（いんたら）のようです。池田会長の詩歌の廣大無辺さは、あらゆる存在のなかに、元初の無垢なる生命を見出しています。読む人に、あたかも私たち自身の社会の雰囲気の中を、そして自然の豊かさの中を歩いているかのごとく思わせながら。

池田会長は、法華経を信仰する同志に限りない愛情を注いでおられます。法華経の真理は（その慈愛のなか

で)どこまでも進化し続けているのです。池田会長は、
釈尊の教えを可能性に満ちた市井の中に——裏町や横
町の中に——蘇らせたのです。人間に限らず生きとし
生けるもの、宇宙と私たちを取り巻く自然は、池田会
長の心の旋律です。その調べは、創造的な行動の美に
よって生命を神秘と結びつけ、人間の関心を深遠なる
価値と融合させます。

多様な「人間の開花」を見出す「眼」

韓国の年代記『三国遺事』には、新羅国の景德王の
時代(742~765年)に生きた田舎の女性・希明の
讚歌が記されています。希明の子どもは5歳のときに
盲目となつてしまいました。希明は子どもを抱いて
寺院(芬皇寺)に詣り、寺院左殿の北壁に描かれた千手
千眼観音の前で、子どもに次の歌を歌わせました。

膝をついて両手を合わせて

千手観音の前に祈って申し上げます

千の手に千の目をお持ちだから

二つ不足の私に一つは下され

あ、私に下され! 私に下されば

人助けに使う慈悲どんなに大ききろうか。

そして、この歌によって、希明の子どもは再び目が見
えるようになったのです。

〔そして以下の讚歌を捧げた。〕

「竹馬に乗り 葱(ねぎ)の笛吹きながら遊んでいた子が
にわかに 両眼が見えなくなつてしまった

千手観音 慈悲の眼をとりかえしてくれなかつたら

幾春 柳の花を見ないで過したであろうか」

(前の詩とともに、三一書房『三国遺事』下、

林英樹訳。巻三・塔像)」

池田会長も、私たちに眼を与えてくださっています。

その眼によって、私たちは「個性を持った一人一人の
人間の開花というイメージ」(『法華経の智慧』第二巻、葉
草諭也)を見ることができなのです。会長は、慈悲の大
雨を注ぎ、菩提の果实を実らせる千手観音であり、法

華経から発する池田会長の智慧の光は、私たちの心のなかの蓮華を開花させてくれるのであります。

私は、池田会長の著作を読めば読むほど、その感動的な講説に心が照らされるのを感じます。池田会長は今ここに、私たちとともに、いらっしやいます。

この思いを、ひとつの詩に託して、私の話を終わります。

「われらの心を静め、安らいだ心を与えてくださる

さすれば 卑しき影はすべて消え去り

すべての浮薄さは征服され

歓喜と平和が あふれだす」――

(Lokesh Chandra / インド文化国際アカデミー理事長)